

被服構成に関する研究 (第5報)

——衿肩あきの形態について——(2)

野 津 哲 子

(被服構成学研究室)

Studies on the Garment Construction (Part 5) The Shapes of Kimono-collar

Tetsuko NOTSU

I 緒 言

和服構成において衿肩あきの形態は着装上の美のポイントであり、また縫製上においても難点といわれている部位でもある。

前報¹⁾で衿肩あきの寸法・衿肩まわりの寸法・形態設定の方法を理論的に見出し、衿つけの縫製に必要な理論式を求め報告したが、今回はその理論値を用いて縫製実験・着用実験を行い考察を試みたのでその結果を報告する。

II 実 験

1 実験材料

実験材料として市販の東京本染綿100%のゆかた地を用いた。材料の諸元は次のとおりである。

実験材料名-----1) 木綿ゆかた地、組織-----平織、厚さ(mm)-----0.33、糸密度(本/cm)経-----25.5・緯-----24.3、繊維-----綿100%。

2) 晒木綿(三つ衿芯に用いた)、組織-----平織、厚さ(mm)-----0.37、糸密度(本/cm)経-----20.0・緯-----20.0、繊維-----綿100%。

2 実験方法

衿肩あきのあけ方・衿つけ縫いこみ・衿肩まわりのしるしつけ方は前報と同様とした。すなわち衿つけ縫いこみを10, 15, 20, 25, 30, 35, 40mmと変化させた7種類。衿肩まわりのしるしつけ方として $\frac{1}{4}$, $\frac{1}{2}$, $\frac{3}{4}$ の4種類計28枚の着物を第1図に示すように衿肩あきより上部80cmを実物製作し着用実験を行った。

寸法の誤差を防ぐため型紙を使用し、身頃の衿付縫代に入る部分の寸法は全部そろえた。

肩当は表布と同じ木綿ゆかた地を使用し三つ衿芯は晒木綿を用いた。

縫製は個人差をなくすため1人で行った。針目間隔は1cm当り約3.3目、針はもめんえりしめ、縫糸は30番カタン糸を使用した。

第1図の試料の準備は次のようにした。

1) 身頃用布は中表に二枚合せ、衿肩あきを左に、後身頃を上、背を手前に、丈を二つ折りとして正しく置く。
2) 後身頃を左に開き前身頃に標付をする。
3) 衿(棒衿)は中表に二枚合せ裁目を手前にして正しく置く。

4) ばち衿-----中表に丈二つに折り、裁ち目を手前にし、裁ち目をそろえて置く。(衿先幅を7.5cmとする)

5) 肩当は横布にて裁つ。後を5cm長くして肩山を定め、衿肩あきをあける。(但し衿肩あきは仕立上げ寸法)

試料の出来上り寸法は次のとおりである。(単位cm)

袖丈60, 袖付21, 袖丸み8, 袖口21, 袖幅32, 身丈160, ゆき66, 衿肩あき8.5, 身八つ口13, 後幅29, 前幅23, 衿下り23, 衿下80, 衿幅15, 合裷幅135, 衿幅上5.5, 下7.5。

製作についての条件は次のとおりである。

衿付

A待針の打ち方(第2図に示すとおりである)

1) 衿肩あきの背ぬいのところに衿山を合せ標通りに、1の待針を打つ。
2) 背ぬいより衿肩あきの三分の一の間は、真直ぐに1.5cm(衿付ぬいこみによって変化する寸法)の縫代にして平らに2の待針を打つ。

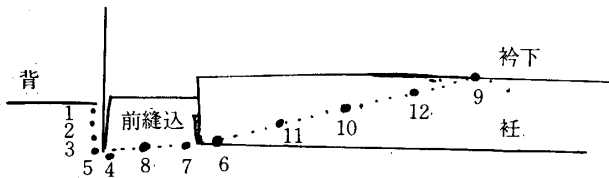
上3cm位の間は小針に縫い、衿肩まわりの部分も小針にし背縫では一針返し、上前も同様にしてつける。

2) 平鏡をあて、衿を表に返し手で軽く衿のみ被せを0.1cmにして折りをつける。

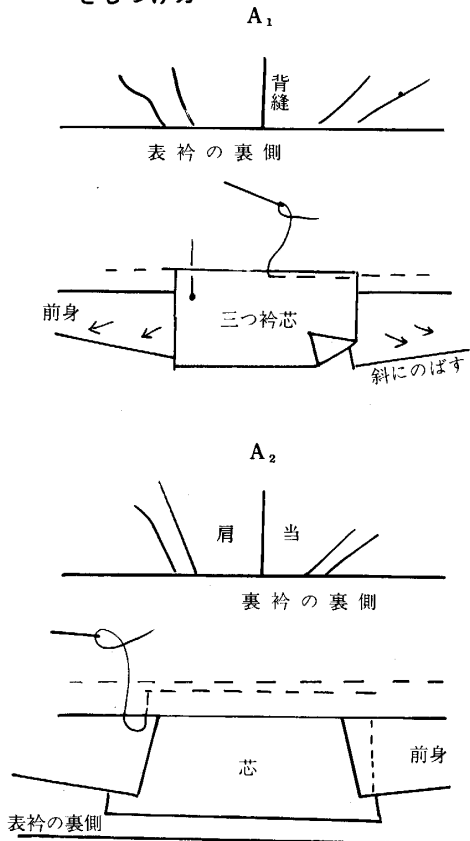
3) 三つ衿芯は、よこ36cmたて13cmの晒木綿を用いる。これを表衿付の縫代に重ねて第3図A₁のように合せてとじつけ、前身頃のぬいこみを矢印の方向に斜に引き伸ばして鏡をかけ、衿との釣合いを平らにし、三つ衿芯の両端と前身ぬいこみとを荒針にとじつける。(第3図A₂)

4) 衿先留および衿先ぬいこみ……衿先留をする位置を定め表衿より針を出し、衿下の端を通り衿の裏側くけ山を縦に抄い逆に返り裏返してしっかり結ぶ。その糸で0.5cm奥を幅のぬいこみは除いて衿の山より0.5cm手前までぬう。留きつちに先のぬいこみを衿の裏の方に折り、幅のぬいこみを折り重ねてとじて表に返す。

第2図 衿つけ方法



第3図 前縫いこみののばし方と三つ衿芯とじつけ方



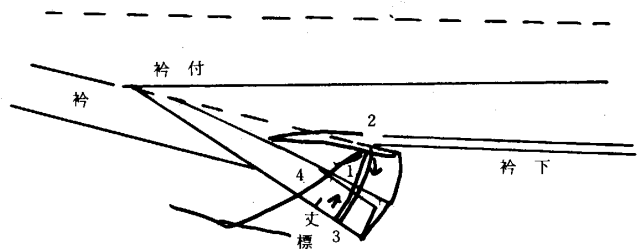
5) 衿くけの釣合いは衿付に準じて待針を打ち、くけはじめは一針返し1cm以内の針目にし、衿肩まわりは小針にくけ、最後は返し留をする。(第4-1図、第4-2図、第4-3図に示すとおりである)

着装条件については着用実験の対象として市販のキイヤ製標準型ボディを用いた。使用したボディの各部位の寸法は次のとおりである。

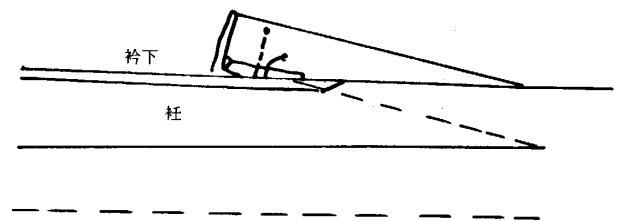
Bust 82cm, 頸囲36cm, Bust におけるボディの厚み26.0cm, 背肩幅38cm, 肩山の傾斜24度。

着装の方法はボディの背中心より頸囲の $\frac{1}{6}$ をとり、これを肩山として着物の肩山をそろえ、ボディの背中央と背ぬいとをそろえて着付を行った。前打ち合せは頸囲の前中心より5cm下った位置で衿山を合せ締め方を一律にするため、コーリンベルトを使用し、自然な状態に着付を行った。以上の方法で着付した製作物で測定を行った。

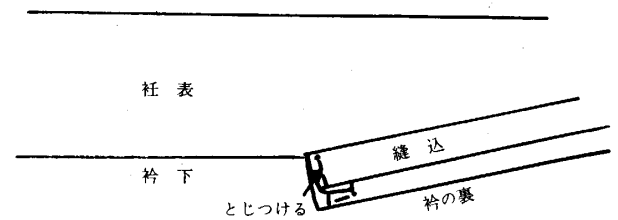
第4-1図 衿先の留め方



第4-2図 衿先の縫い方



第4-3図 衿くけ縫込みの留め方



3 測定項目

① 背中心における頸と衿の離れ寸法(測定方法は直角定規を用いボディの頸と衿の離れ寸法をはかった)

② 背中央における衿の傾斜角度(測定方法は支点を背中央の衿付線にあてて傾斜角度を求めた)

③ 肩山における衿の上端から頸までの離れ寸法(測定の方法はボディの頸に直角定規をあてて衿までの距離をはかった)

④ ボディの第7頸椎と後衿付点との離れ寸法(測定の方法は巻尺で衿付点から背中央における衿付点までの距離をはかった)

測定は同一人が5回行いその平均値を求めた。

III 結果および考察

測定の結果を二元配置によって分散分析を測定部位別に行い、第1-1表より第1-4表に示した。

測定箇所(1)の背中心における頸と衿の上端までの離れ寸法については次のようである。

要因衿肩まわりのしるしつけ方の変化・衿つけぬいこみの深さについてその値を分散分析すると有意水準1%で有意差が認められた。衿つけぬいこみが10mm, 15mmの場合衿肩まわりのしるしつけ方 $\frac{1}{4}$, $\frac{1}{2}$ においては頸から衿までの離れ寸法は10mmで頸にほとんど接近した状態となる。衿肩まわりのしるしつけ方 $\frac{1}{4}$, $\frac{1}{2}$ になるとそれぞれ15

mm頸より離れ前者との差は5mmである。衿つけぬいこみ20mm, 25mmの場合衿肩まわりのしるしつけ方 $\frac{1}{4}$, $\frac{1}{2}$ においては頸から衿までの離れ寸法は22mmと衿つけぬいこみが10mm, 15mmより増大している。衿肩まわりのしるしつけ方 $\frac{1}{4}$, $\frac{1}{2}$ になると衿までの離れ寸法は24mmと衿つけぬいこみ10mm, 15mmより9mm増大している。衿肩まわりのしるしつけ方 $\frac{1}{4}$, $\frac{1}{2}$ の場合で衿つけぬいこみ10mmの最小と衿肩まわりのしるしつけ方 $\frac{1}{4}$, $\frac{1}{2}$ の場合で衿つけぬいこみ40mmの最大とを比較してみると最小の離れ寸法10mmに比して41mmと最大の離れ寸法であった。衿肩まわりのしるしつけ方 $\frac{1}{4}$, $\frac{1}{2}$ についてみても最小の15mmに比して44mmと最大の離れ寸法であった。

紙上の関係で今回は衿肩まわりのしるしつけ方 $\frac{1}{4}$ まっすぐの場合衿つけぬいこみ7種類の縫代が衿の中にある状態を写真1-1より写真1-7に示した。これによると衿つけぬいこみ10mm, 15mmは衿布に無理なくなじんでいる。衿つけぬいこみ20mmでは背ぬいで2mm開き衿つけぬいこみが25mmになると肩山との差が大きくなるため背ぬいで4mm開いて左右に引張られる状態となる。衿つけぬいこみが30mm以上になると背ぬいの開きが10mm以上となっている。縫製実験および着用実験の結果は写真2-1より写真2-6に示した。また先に述べた背ぬい開きが衿肩あき止りの角度に関係していると思われるので第2表に示した。

第1-1表 背中心における頸と衿の離れ寸法の分散分析表

要因	S	ϕ	V	Fo
衿肩まわりのしるしつけ方 ($\frac{1}{4}$, $\frac{1}{2}$, $\frac{1}{2}$, $\frac{3}{4}$)	1197.50	3	399.16	143.07**
衿付縫込の深さ (10, 15, 20, 25, 30, 35, 40mm)	625.42	6	104.23	37.36**
誤差	53.08	19	2.79	
計	1876.00	28		

** 有意水準1%で有意差あり

第1-3表 肩山における衿の上端から頸までの離れ寸法の分散分析表

要因	S	ϕ	V	Fo
衿肩まわりのしるしつけ方 ($\frac{1}{4}$, $\frac{1}{2}$, $\frac{1}{2}$, $\frac{3}{4}$)	3.37	3	1.12	12.63**
衿付縫込の深さ (10, 15, 20, 25, 30, 35, 40mm)	3.64	6	0.60	6.82**
誤差	1.62	19	0.08	
計	8.63	28		

** 有意水準1%で有意差あり

第1-2表 背中央における衿の傾斜角度の分散分析表

要因	S	ϕ	V	Fo
衿肩まわりのしるしつけ方 ($\frac{1}{4}$, $\frac{1}{2}$, $\frac{1}{2}$, $\frac{3}{4}$)	11149.75	3	3716.58	181.21**
衿付縫込の深さ (10, 15, 20, 25, 30, 35, 40mm)	4421.57	6	736.93	35.93**
誤差	389.68	19	20.51	
計	15961.00	28		

** 有意水準1%で有意差あり

第1-4表 ボディの第7頸椎と後衿付点との離れ寸法の分散分析表

要因	S	ϕ	V	Fo
衿肩まわりのしるしつけ方 ($\frac{1}{4}$, $\frac{1}{2}$, $\frac{1}{2}$, $\frac{3}{4}$)	14.66	3	4.89	27.16**
衿付縫込の深さ (10, 15, 20, 25, 30, 35, 40mm)	12.05	6	2.01	11.16**
誤差	3.48	19	0.18	
計	30.19	28		

** 有意水準1%で有意差あり

写真1 作図法による衿肩まわりのしるしつけ%まっすぐの場合
衿つけぬいこみ7種類の縫代が衿の中にある状態

写真1-1

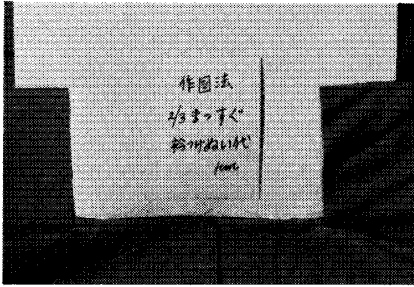


写真1-2

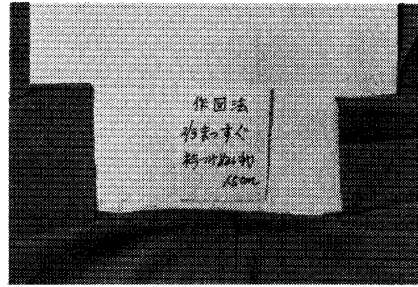


写真1-3

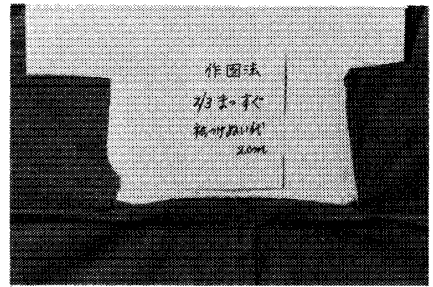


写真1-4

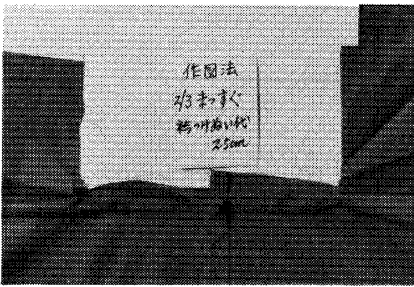


写真1-5

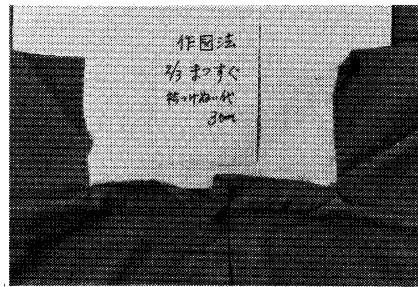


写真1-6



写真1-7

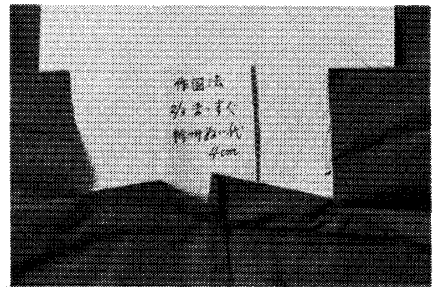


写真2 作図法による衿つけ縫代の深さに対する衿肩まわりと衿肩あき
寸法の差の近似式による近似値を用いた製作試料
(衿つけ縫代の深さ40mmは一般に用いられないので省略)

写真2-1



写真2-2

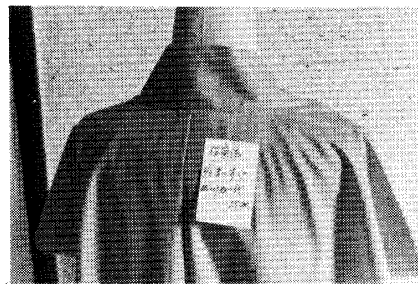


写真2-3

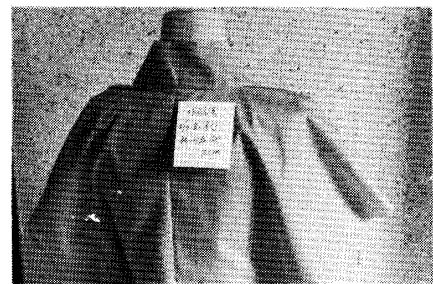


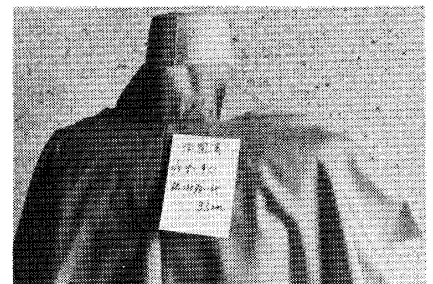
写真2-4



写真2-5



写真2-6



第2表 作図法による衿肩明き止りの角度 (単位度)

OA BFの値	A G の 長 さ (a)						
	10	15	20	25	30	35	40 (mm)
1/4	10	10.5	18	20	24	27	31
1/3	10	10.5	20	23	27	30	35
1/2	10.5	20	25	30	34	37	41
2/3	20	20.5	35	38	45	48	51

(注) OA, BF, AGについては前報参照

測定箇所(2)の背中央における衿の傾斜角度については次のようである。

要因衿肩まわりのしるしつけ方の変化・衿つけぬいこみの深さについてその値を分散分析すると有意水準1%で有意差が認められた。

衿つけぬいこみが最小である10mmについてみると、衿肩まわりのしるしつけ方(1/4, 1/3, 1/2, 2/3)に関係なくいずれも頸につき衿が立っている状態である。最大の40mmについてみると148度とその値は大きく最大の倒れ具合であった。すなわち後方への衿の開きが大きいわけである。衿つけぬいこみの寸法が深くなるに従って衿は大きく傾斜している。衿付点が低下するため背の丸みに対する接線が垂直方向に移動するためと考えられる。

以上の結果から衿つけぬいこみの浅い方が傾斜角度は最小となり背中央の衿は後方に倒れる状態となる。

測定箇所(3)の肩山における頸と衿の離れ寸法については次のようである。

要因衿肩まわりのしるしつけ方の変化・衿つけぬいこみの深さについてその値を分散分析すると有意水準1%で有意差が認められた。

衿肩まわりのしるしつけ1/4, 1/3で衿つけぬいこみが10mmの場合は1/4, 1/3とも9mm頸より衿は離れている。1/2, 2/3についてみると11mmと頸より衿は離れている。衿つけぬいこみ20mmの場合の1/4, 1/3は10mmと頸より衿は離れている。衿肩まわりのしるしつけ1/2, 2/3についてみると13mmと衿は離れている。衿つけぬいこみ10mm, 衿つけぬいこみ20mmの衿肩まわりのしるしつけ1/2, 2/3についてみるとその差は2mmである。

すなわち衿つけぬいこみの浅い方が頸に接近した衿となる。背中央における衿の開角度が大きくなり、衿の上端は後に引張られ、肩山で傾斜がゆるやかになって、頸に接近するものと考えられる。すなわち肩山の傾斜に起因することが大きい。

測定箇所(4)のボディの第7頸椎と後衿つけ点との離れ

寸法については次のようである。

要因衿肩まわりのしるしつけ方の変化・衿つけぬいこみの深さについてその値を分散分析すると有意水準1%で有意差が認められた。

衿つけぬいこみ10mmの場合についてみると衿肩まわりのしるしつけ方に関係なくボディの中心点であった。衿つけぬいこみ15mmの場合も衿肩まわりのしるしつけ方に無関係に17mmであった。衿つけぬいこみ20mm以上になるとそれぞれの値は22mm, 25mm, 28mm, 31mm, 33mmと増大していく。すなわち背中心の衿つけ位置は、衿つけぬいこみが大きくなるにしたがって低下していく。肩山から衿つけ位置の距離に関係があると思われる。

縫製実験についてみると衿つけぬいこみ20mmの場合が一番無理なく縫製できた。着用実験の結果をみても後衿つけ線のカーブが美しく見える。これは衿の中のぬいしろが立って衿の腰がきちっとするためと思われる。また衿が立ち加減になり若い人に好まれる。

IV 要 約

7サイズの寸法と4形態の実験衣を設定して製作実験・着用実験を行った結果を要約すると次のようなことがいえる。

①背中心における頸と衿の離れ寸法についていえることは衿つけぬいこみが浅い場合衿肩あきの形態(1/4, 1/3, 1/2, 2/3)が背中心に近い場合頸についた衿となる。逆に衿肩あき止りからの距離が近くなると頸からやや離れた状態となる。衿つけぬいこみが深くなると衿肩あきの形態にはほとんど関係なく頸から離れた状態となる。

たとえば衿つけぬいこみが最大の40mmの場合頸から41mmから44mm離れ最大の値を示している。これは背中央における衿つけ点の位置が低下するためと考えられる。

縫製についてみると衿つけぬいこみが浅いと衿肩あき止りの縫いしろが直角に近くなる。また背幅にそって平らになり衿つけが非常に縫製しにくい。衿つけぬいこみが20mm以上になると衿肩あき止りの縫いしろが鈍角に近くなり頸にそって曲線となるため縫製しやすい。衿肩あきの形態については2/3・背ぬいにおける衿つけぬいこみは20mm以上が後衿つけ線に美しさがみられた。

着用実験による衿元の美しさからすれば20mm以上の衿つけぬいこみの方が頸にそって良いと思われる。

②背中央における衿の傾斜角度についてみると衿つけぬいこみが深くなるに従って背中央における衿の傾斜は大きい。すなわち衿つけ点が低下することによって、背のまるみに対する接線が垂直方向に移動するためと考えられる。

③ 肩山における衿の上端から頸までの離れ寸法についてみると背中央における衿つけぬいこみが浅いと衿から頸までの距離は大きい。すなわち背中央における衿の角度が大きくなるため、衿の上端は後に引張られ、肩山のあたりで傾斜がゆるやかになり、頸に接近してきたものと思われる。

背中央における衿つけぬいこみが深い場合は衿から頸までの距離は小さい。従って肩山の位置におけるボディの厚みと肩山の傾斜に起因するところが大きいものと思われる。

④ ボディの第7頸椎と後衿つけ点との離れ寸法についていえることは衿つけぬいこみが浅いと背中心における衿から頸までの距離は小さい。衿つけぬいこみが深くなると衿から頸までの距離は大きい。すなわち背中心の衿つけ位置が低下するためと思われる。

縫製実験・着用実験の結果から衿つけぬいこみについては20mm、衿肩まわりのしるしつけ方については $\frac{2}{3}$ を用いておけば、ほとんど支障がないものと思われる。

参 考 文 献

- 1) 野津哲子：本誌，14，（1976）
- 2) 奈良女子高等師範学校裁縫研究会：裁縫精義，東洋図書（1963）
- 3) 岩松マス：和服裁縫，雄鷄社（1966）
- 4) 清水とき：新しい和服裁縫，永岡書店（1971）
- 5) 土井幸代：和裁，同文書院（1971）
- 6) 柳沢澄子：被服構成学，12（1973）
- 7) 石田はる：和服裁縫，主婦の友社（1971）
（昭和52年1月14日受理）